

まはしめて、宮に還り坐しき。
 故、其の赤猪子、天皇の命を仰ぎ待ちて、既に八十歳を經ぬ。是に、赤猪子が以為はく、「命を望ひつる間に、已に多たの年を經ぬ。姿体、瘦せ萎えて、更に待む所無。然れども、待ちつる情を顯すに非ずは、悝きに忍へじ」とおもひて、百取の机代の物を持たしめて、参る出でて貢献りき。然れども、天皇、既に先に命へる事を忘れて、其の赤猪子を問きて曰ひしく、「汝は、誰が老女ぞ。何の由にか参る来つる」といひき。爾くして、赤猪子が答へて白ししく、「其の歳其の月、天皇の命を被りて、大命を仰ぎ待ちて、今日に至るまで、八十歳を經ぬ。今は容姿既に耆いて、更に待む所無し。然れども、

己が志を顯し白さむとして参る出でつらくのみ」とまをしき。是に、天皇、大きに驚きて、「吾は、既に先の事を忘れたり。然れども、汝が志を守り、命を待ちて、徒に盛りの年を過しつること、是甚愛しく悲し」と、心の裏に婚はむと欲へども、其の亟めて老いて、婚を成すこと得ぬことを悼みて、御歌を賜ひき。雄略天皇が三輪川のほとりで洗濯をしていた乙女に出会った。その姿かたちは美しく、天皇は尋ねた「どちらのお嬢さんだい？」、乙女は「引田部赤猪子と申します」と自ら名乗る。名前を尋ねられて自らの名を答えると、それは求婚に応じたことになる。天皇は「宮に帰つたら、召し出すので、誰にも嫁がず待つていなさい」といって颯爽と去つて行った。ところが、宮に帰つた雄略天皇はこの約束をコロリと忘れてし

まいったのだ。八十年の歳月が経ち、美しかった赤猪子もお婆ちゃんになった。「こまで待たされたことを知らせないでおくのは、心残りだわ」とばかり、ちよつと派手な着物を着て、たくさんのお贈り物を持って宮殿に出かけた。初め、「どこのお婆ちゃんだい」と言っていた雄略天皇の記憶がよみがえり、「忘れていたことを自ら認め、赤猪子に歌を贈つて謝つた」という。こうした失敗譚を持つ天皇の歌を『万葉集』は大切な巻頭に掲げるのである。

雄略天皇は埼玉県鴻巣市の稲荷山古墳から出土した鉄剣銘に「獲加多支鹵大王」とその名がみえ、中国の史書『宋書』には倭の五王の五人目「武」として登場する。東国にまでその治世が及び、大陸までその名が聞こえていた偉大な天皇の一人であった。正史である『日本書紀』では即位の次第から「大悪天皇」と評される



三輪山(磯城珠城宮社付近より)

天皇であるが、『古事記』には、『日本書紀』では語られない婚姻譚が語られる。この意義はさまざまに説かれているが、ゆるがせにできないのは「偉大な大王の婚姻譚」であり、「偉大な大王の御製歌である」という点だ。春の初めに「大王の婚姻」が話題として取り上げられるこ

とは、その御代の繁栄を予祝することでもある。同時に、こうした歌を巻頭に据えることの意義は雄略天皇という一人の大王に歴史的な画期を見ていたからに他ならない。『万葉集』という名の歌集はこうした歴史的な意義を持ちつつ「呱呱の声」をあげるのである。

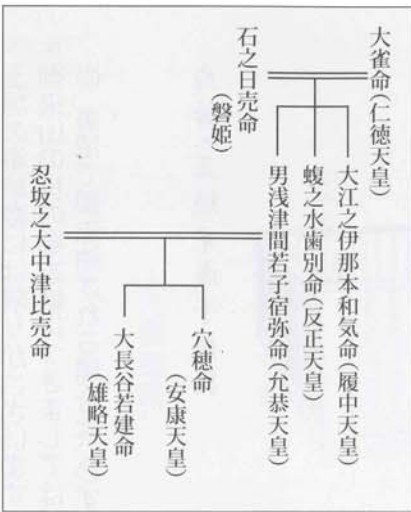
『万葉集』から見る日本の古典

國學院大學兼任講師 城崎 陽子

今回から『万葉集』からみる日本の古典」と題して、日本の古典文学の中でも、最も古い時代に位置する『万葉集』を中心に取り上げ、周辺の古典文学作品を織り交ぜつつ様々な話題を提供してみたいと思う。

『万葉集』は全二十巻、四千五百余首に及ぶ「現存最古の歌集」である。最

も古い仁徳天皇皇后磐姫の歌から、最も新しい大伴家持の天平宝字三年(七五九)正月の歌まで、四百数十年に渡る歌が収められている。この間、ほぼ切れ目なく続けて歌が収められているのは舒明天皇(六一九年即位)の時代以降であり、そのおよそ百三十年間を『万葉の時代』と称するこ



『古事記』雄略天皇関係系図

とができる。今回取り上げるのは『万葉集』の巻二「一番歌」つまり「巻頭歌」として位置づけられている雄略天皇の御製である。

雑歌
 泊瀬朝倉宮に天の下治めたまひし天皇の代「大泊瀬稚武天皇」

天皇の御製歌
 籠もよみ籠持ちふくしもよみぶくし持ちこの岡に菜摘ます兒家告らせ名告らさねそらみつ大和の国はおしなべて我こそ居れしきなべて我こそいませ我こそは告らめ家をも名をも

(巻一・一番歌)
 作品の始めに掲げられている「雑歌」とは、『万葉集』の中で歌を分類する「部立」と呼ばれるもので、「雑歌」は「くさぐさの歌」の意とされ、宮廷儀礼や行幸従駕(注)・天皇の行幸に従事することの歌がこれにあたる。次に示され

る「泊瀬朝倉宮に天の下治めたまひし天皇の代は、「標目」と呼ばれ、天皇の御代を示すものである。「泊瀬朝倉宮」は雄略天皇の皇居であり、下に続く「大泊瀬稚武天皇」は、雄略天皇の和風諡号であることから、この歌が雄略天皇の御代の歌であることを示している。そして、続く「天皇の御製歌」は、「題詞」と呼ばれ、この歌が天皇の作歌であることを意味しているから、当該の一首は雄略天皇の御歌となる。

ところで、天皇の御製歌であるならば、格調高き歌が予想されるが、この歌は、早春の頃、「籠とふくし」(注)・ヘラ状のもの)を手にして野に出かけて若菜をつむ乙女に「籠とふくしをお持ちのお嬢さん、家をおつしやい、名前をおつしやい」と言い寄る歌で、今風に言うところの「ナンパ」の歌であるのだ。この当時、女性に「家や「名」を聞くことは、求婚することと等しかつ

たから、雄略天皇は早春の野辺で出会ったお嬢さんにいきなり求婚したということになる。求婚されたお嬢さんの方は驚いて声も出ないだろう。そこで、「この大和の国は私が治めているのですよ、私こそ名乗りましょう、家も名も！」と歌は続き、「下や顔」をしている雄略天皇の姿が浮かぶ。

亦、一時に、天皇遊び行きて、美和河に到りし時に、河の辺に衣を洗ふ童女有り。其の容姿、甚麗し。天皇、其の童女を問ひしく、「汝は、誰が子ぞ」といひ。答へて白ししく、「己が名は引田部赤猪子と謂ふ」とまをしき。爾くして、詔はしむらく、「汝は、夫に嫁はずあれ。今喚してむ」とのりた